

はじめに（日米の光と影）

振り返れば、1933年（昭和8年）というのは日本にとって、最も不幸な年だったのかもしれない。米国において、フランクリン・ルーズベルト大統領が誕生し、彼は「大恐慌のあと疲弊していた米国経済を再興させた救世主」と称賛される大統領となった。他方日本は、この大統領の時代に無謀な太平洋戦争に突入していったのである。戦争の理由は色々あるが、やはり一番には経済的な理由がその根底にあったと思う。つまり、その深層を探っていけば、米国の経済的理由で戦争に突入していった部分も少なくないと推測する。大恐慌のあと、米国経済を本格的な成長軌道に向かわせるために、日本を踏み台にする必然性が全てではないにせよ、かなり大きな要因であったと考える。

時代は変わって、1980年代後半、日本が不動産・株式バブルで踊っている頃（参照表16ページ）、NYダウは3000ドルにも届かず、その頃の米国経済は停滞していた。

しかし1990年代に入り、日本のバブル崩壊とは裏腹に1992年以降米国経済は息を吹き返し、同時にNYダウは3000ドルを突破、今日に至るまで右肩上がりの上昇（絶対調）を続けている。その間、約25年に亘って日本の停滞（デフレ状態39ページ参照）は続いている。

1990年代以降の日米の株価は全く逆方向に進んで来た。日米の経



1945年2月23日硫黄島 ジョー・ローゼンタール氏撮影

「済は、時代の局面によつては全く逆方向を走っているようにも思える。日米は、果たして光と影の関係にあるのだろうか。わかつているようで、全く理解されていない米国経済の強さの根源をこの稿で紐解きたい。」

その中に日本の復活劇の答えがある。

2019年1月

武 正雄